

陳朝期ナムディン省出土碗皿の製作技法による分類と編年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2847

陳朝期ナムディン省出土碗皿の製作技法による分類と編年

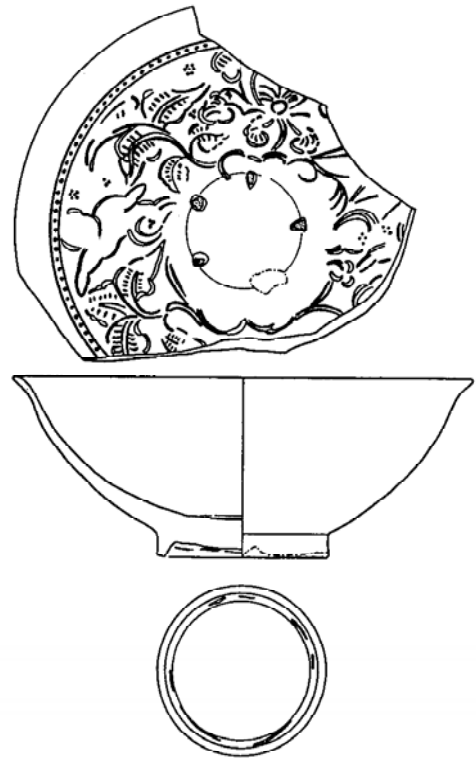
西野 範子

この論文は、ヴェトナム、ナムディン省で出土した陳朝期（1225～1400年）碗皿を、製作過程（成形と調整→施文→施釉→サヤ詰め）に沿って、各技法ごとに分解し、分類体系の作成及び編年の提示を目的とする。

まず、碗皿に残る痕跡から、陳朝期における製作技法と製作過程の種類の可能性を導き出した。「型作り」成形と「水挽き」成形で体部を成形し、高台部は、底部全体に粘土を張り付けて削り出すもの、高台下位にのみ粘土を付け足して削り出すもの、ただ単に削り出すものが確認できた。施文は一般的には「器形成形後、施釉前」に施されるが、模に押印する印花文では、器形成形と同時に押印する場合と器形を成形してから押印する場合の双方が陳朝期に存在する。今回扱った碗皿資料は破片が主であり、口縁部から高台部まで残存する資料が少ないため、技術的特徴が表れやすい高台部を中心に上げ、「高台製作技法」、「施文技法」、「サヤ詰め技法」に分解し、

それぞれの技法に応じて分類した。「高台製作技法」では、時期的特徴を最もよく表す高台接地部の「削り取り」の位置を大分類に設定し、PreI類（高台接地部内側を削り取る。李朝期から続く技法をもつ）、I類（高台接地部を外側と内側から削り取り、接地部が尖る）、II類（削り取りなし）、III類（高台接地部外側を施釉前に削り取る）、IV類（高台接地部外側を施釉前に削り取る）、V類（高台内を非常に低く削り出す）の6分類に分けた。削り取りの大小や、断面の形の差違は中、小分類で示した。「施文技法」では、施文位置（内面、外面、高台内）、施文道具（模、ヘラ、スタンプ、筆）、割付区画法（「帯状区画」、「放射状区画」）に大きく分類した。「サヤ詰め技法」では、器体内面と高台部の痕跡から、窯道具（なし：I類、白色土：II類、粘土粒：III類、トチン：IV類）と窯道具の設置場所（高台内：α、高台接地部：β）により分類した。以上の各分類間の対応関係を考察すると、3技法の相関関係には一定の法則性があることが確認できた。特に、高台接地部の削り取りの場所、高台断面の形とサヤ詰め技法は、密接な関係をもつ。主に、高台接地部を尖らせる資料には白色土を付着させ直接重ね、高台接地部が平らで面積をもつ資料には窯道具を高台接地部に設置し、釉が高台接地部まで施されるものは、高台内に窯道具を設置している。高台の低いものは高台内に、高台の高いものは高台接地部に窯道具が設置されている。各技法分類ごとの型式的変遷と相関関係の交差から、型式の連続性を導き、型式連続の新旧方向は、陳朝期の資料のなかで最も年代の遡る資料を李朝期（1009～1225年）の型式に、最も年代の下る資料を15世紀初頭の資料に求めた。陳朝期を6期にわけ、I期は李朝と類似するタイプを、II期には型式的にI期と繋がりのある資料を、IV期は日本出土資料以前の資料を、V期には日本出土最初期の資料、VI期には15世紀初頭資料に型式的に繋がる資料を各時期の境界線として活用した。各時期間の細かい前後関係はサヤ詰め技法や施文技法との交差関係から導いた。

I期（13世紀前期）は高台を比較的細く高く作り、白色土を高台接地部に薄く付着させて重ねる。印花文は李朝から既に確認されVI期まで連続して確認できるが、III、IV、V期に最も多く頻出する。I期には刻花文が多く見られる。II期（13世紀中期）では、高台接地部の外側内側から比較的大きく削り取り、前期に引き続



ナムディン省出土陶磁器

き白色土を薄く付着させてサヤ詰めしている。III期（13世紀後期から14世紀第1四半期）ではII期よりも高台部接地部の削り取り部が浅くけずられるようになり、サヤ詰め技法もII期の資料よりも厚く白色土を付着させている。IV期（14世紀第2四半期）は、資料の種類が豊富になる。印花文碗は、湾曲する体部から、口縁部に向かって直線的に広がるタイプに移行する。模の形が変化したのはもちろん、碗を成形してから模を押印するものから、タタラ状の粘土を直接模にあてるという製作技術に大きく変化した。高台はII類、IV類、V類が含まれる。サヤ詰め技法では高台内に粘土粒を接地させるものが一般的である。輪状でドーナツ状の白色粘土紐を用いる例もある。高台内に「天長府製」と筆で書かれた資料はこの時期に限って確認できた。外面に刻花文を施す技法がこの時期に多く見られる。V期（14世紀後半）では、高台III類とV類が中心となり、サヤ詰め技法は、高台接地部に粘土粒を付着させる方法が一般的となる。印花文は帯状区画に代わって放射状区画や円文による文様充填が多く見られるようになる。筆を用いて描く青花や鉄絵はこの時期より現れる。VI期（14世紀末）は15世紀の高台と類似し、高台III、I

V類が中心で、粘土粒を高台接地部に接地するサヤ詰め方法の他に、「輪状の釉剥ぎ」の方法が普及し始める。「輪状の釉剥ぎ」の技術はII期より確認できている。高台内に鉄錆を塗る技法はこの時期一般的となる。